

「感じる必要のない苦痛」

皆さんはこれまでの人生において何かを共創しことはあるだろうか。幼い頃近所の子達で集まり公園の砂場を占領した。そこで日が暮れるまで川の流れる大きな城をつくった。中学、高校に上がると初めて文化祭というものを経験した。限られた場所、期間の中でクラスメイトや部活の仲間たちと教室を綺麗に飾った。そしてきっとこれから大学に進学し、後に社会に出ていったとしても企業との案件やプロジェクトなど今まで以上に誰かと協力して意見を出し合う機会があるだろう。私達は知らない間に意外と多くの事で誰かと共創してきている。そしてこれは私達の身体にも共通して言えるであろう。例えば今の日本で暮らす人の中で今までに一度も病院に受診をしたことがない人はまずいないだろう。まずほとんどの人が病院で産声をあげた。そして風邪や怪我、インフルエンザ等の流行病それに健康診断においても私達は日々病院にお世話になっている。様々な科の医師の意見、健康法について羅列された本や今では誰もが持っているスマホから引用された情報、そして何より自分の体調、機嫌がまさに身をもってわかる自分自身の存在。これらの多くの異なる視点から自分の身体を客観的にも主観的にもみることで私達は今の身体の状態を保ってきた。要するに現代日本人の私達の身体はあらゆる視点をもつものが共創し、構築されたものなのだ。

また私の大叔母は自身の母から腎臓を1つ提供してもらった経験がある。大叔母が39歳の頃に腎不全となり2つの腎臓が完全に機能しなくなった。しばらくの間は透析療法(働かなくなった腎臓の代わりに人工的に血液の浄化を行う療法)をしていたが血管痛が酷く腎移植のレシピエントとなることを決意した。腎移植の提供は原則親族に限られる。また、腎臓は2つの内1つが正常に機能していれば日常生活に支障を来すことはないので生体移植(生きている人から臓器を譲り受けること)がよく行われる。その為大叔母の母が自らドナーに名乗り出た。移植手術は無事成功し曾祖母は余生を健康に過ごし、大叔母も冬に家を訪ねると今でも元気な姿で向かい入れてくれる。私はこの話を聞いた時にもう一度共創について考えてみた。大叔母は母からの腎移植を受けたことできちんと機能する腎臓を得て透析療法の苦痛から解放された。この移植において大叔母と曾祖母、他にも移植手術に携わった全ての人達が共創したことで大叔母のいのちに新たな価値を生み出した。私は当時まだ生まれていなかったし、今と比べてそれほど発展していなかった医療の想像もつかないがとても心が温かくなった。これからもっと生体移植への世間の理解

も深まり、メジャーなものになっていけば今まで患者が感じていた、「感じる必要のない苦痛」から解放してあげられる最適な手段となるだろう。もはや現代医療は治癒・救命だけに留まらず患者とその家族が共創できる機会を与えるまでに発展したのだ。そしてまたこの共創できる医療技術を生んだのは多くの医療従事者の血の滲むような共創の結果なのだろう。

ところが私達世間一般の考え方が驚異的なスピードで進歩する医療から置いて行かれているように感じる。どれだけ医療が高度なものになっても第三者の考えが患者を苦しめるものであるのならばその価値が下がってしまう。患者は精神面で「感じる必要のない苦痛」を味わうことになってしまうのだ。そんな医療が発展した今だからこそ必要なのは“見えないものを、聞こえないものを感じる力”だと私は思う。今日、大抵のことはすぐに情報として視覚化、可聴化される便利な世の中となった。これは医療においても同じ事が言え多くの病に確立した治療法があり、不治の病と言われていたものでさえ再生医療の技術により人類は克服しようとしている。少しでも身体に異変を感じたらすぐに検査ができ、その日のうちに身体の状態がデータ化、画像化され治療を始められる。だからこそ私達はどんなに優秀な機械でも感じるできない患者のSOSに目を向け、悲鳴に耳を傾けなければならない。それが実現する為には able-bodied である人達も当事者意識を持ち、「感じる必要のない苦痛」を和らげられる社会を患者と共創することが必要だと思う。私達は生活している上で当たり前前の事を当たり前のようにできているだろうか。優先席では席を譲れているか、点字ブロックを遮るような行為はしていないか、SNS への書き込みは誰が見たとしても傷つかない内容か、患者だけでなく医療従事者にも偏見を持ち差別をしていないか。私達は多種多様だ。患者、家族、友達、医療従事者、世間、マスコミ、政府。立場が異なるからこそ、何事にも関わりやすくなったからこそ、自分は one of them だという認識を捨て高度な医療に伴った考え方を持つ人で構築された社会を共創したい。多種多様は弱みではない。共創により作られたものは崩れにくいのだ。